

## 「新収蔵作品特別展示—浅井裕介《八百万の森へ》」

## 「新たにむかえた作品たち—生活・手仕事・身体」

## 「新収蔵作品特別展示—浅井裕介《八百万の森へ》」

[ギャラリー5]

No	作家名	作品名	制作年	技法、材質、形状	サイズ 縦/高さ x 横/幅 x 奥行/厚さ cm	エディ ション	収蔵方法 収蔵品番号
1	浅井 裕介 1981年生まれ	八百万の森へ	2023年 令和5年	土、アクリル樹脂、木炭、 鉛筆、弁柄、パネル	325.0 x 390.0		横浜信用金庫創立100周年 記念寄附による購入 2023年度新収蔵
2	浅井 裕介 1981年生まれ	《八百万の森へ》のための 構想図	2022年 令和4年	土、水性絵具、紙	25.0 x 30.0		浅井裕介氏寄贈 2024年度新収蔵

## 「新たにむかえた作品たち—生活・手仕事・身体」

[ギャラリー6]

No	作家名	作品名	制作年	技法、材質、形状	サイズ 縦/高さ x 横/幅 x 奥行/厚さ cm	エディ ション	収蔵方法 収蔵品番号
3	吉澤 美香 1959年生まれ	は - 9	1990年 平成2年	ABSインク、ABS樹脂	201.5 x 202.0		北田治氏寄贈 2023年度新収蔵
4	吉澤 美香 1959年生まれ	は - 10	1990年 平成2年	ABSインク、ABS樹脂	201.5 x 198.5		北田治氏寄贈 2023年度新収蔵
5	平林 薫 1955年生まれ	五十一音 いんさつき (平仮名)	1986年 昭和61年	ペイント、合板、和紙、 金属	印刷機：140.0 x 35.0 x 50.0 人型：158.0 x 50.0		北田治氏寄贈 2023年度新収蔵
6	平林 薫 1955年生まれ	五十一音 印刷機 (漢字)	1986年 昭和61年	ペイント、合板、和紙、 金属	印刷機：140.0 x 35.0 x 50.0 人型：162.0 x 67.0		北田治氏寄贈 2023年度新収蔵
7	福田 美蘭 1963年生まれ	水曜日	1988年 昭和63年	アクリル絵具、合板に貼付 けた綿布、紙	181.8 x 227.2		購入 1990-OJ-005
8	椿 昇 1953年生まれ	910102	1991年 平成3年	ミクストメディア、紙	108.0 x 190.0		北田治氏寄贈 2023年度新収蔵
9	椿 昇 1953年生まれ	910124	1991年 平成3年	ミクストメディア、紙	131.0 x 190.0		北田治氏寄贈 2023年度新収蔵
10	椿 昇 1953年生まれ	No Bad Jungle	1991年 平成3年	ミクストメディア、紙	34.0 x 26.0 x 8.5		北田治氏寄贈 2023年度新収蔵
11	辰野登恵子 1950-2014年	work 76-D-8	1976年 昭和51年	シルクスクリーン	74.0 x 107.0		個人蔵(寄託) 2006-PRJ-K-004
12	石原 友明 1959年生まれ	無題、1986	1986年 昭和61年	感光乳剤、アクリル絵具、 カンヴァス	70.0 x 300.0 x 400.0		購入 1992-PHJ-001
13	石原 友明 1959年生まれ	Untitled	1989年 平成元年	アクリル絵具、オイルパス テル、ゼラチン・シル バー・プリント	50.0 x 50.0		賛美小舎 上田國昭氏・ 上田克子氏寄贈 2010-PHJ-004

14	石原 友明 1959年生まれ	Untitled	1990年 平成2年	ゼラチン・シルバー・プリント、アクリル絵具、カンヴァス	77.5 x 77.5 x 14.0		賛美小舎 上田國昭氏・上田克子氏寄贈 2010-PHJ-009
15	森村 泰昌 1951年生まれ	私の中のフリーダ（髪を切った自画像1）	2001年 平成13年	発色現像方式印画	150.0 x 113.0		寄託 2009-PHJ-K-011
16	森村 泰昌 1951年生まれ	私の中のフリーダ（支える力）	2001年 平成13年	カラー写真、カンヴァス加工	150.0 x 120.0		寄託 2009-PHJ-K-006
17	森村 泰昌 1951年生まれ	私の中のフリーダ（自分との対話1）	2001年 平成13年	発色現像方式印画	195.0 x 175.0		寄託 2009-PHJ-K-009
18	松井 智恵 1960年生まれ	彼女は溶ける	2000年 平成12年	ビデオ（カラー、サウンド、57分10秒）	サイズ可変		賛美小舎 上田國昭氏・上田克子氏寄贈 2010-PHJ-111
19	スブツニ子！ 1985年生まれ	生理マシン、タカシの場合	2010-2011年 平成22-23年	ビデオ（カラー、サウンド、3分24秒）、発色現像方式印画、デバイス（アルミニウム、電子機器、アクリル）	サイズ可変		寄託 2022-PHJ-K-003
20	クリス・ヒュン・シンカン 1991年生まれ	ポーチー、ムイムイ、ジョエルとドゥードゥー	2020年	油彩、カンヴァス	200.0 x 240.0 x 5.0		寄託 2022-OF-K-003
21	ヘルナン・バス 1978年生まれ	彼のものは花に擬態する唯一の種として知られる	2017年	アクリル絵具、エナメル、麻布	152.4 x 121.9		寄託 2022-OF-K-001
22	岩崎 貴宏 1975年生まれ	アウト・オブ・ディスオーダー（山と海）のためのドローイング	2017年 平成29年	シルクスクリーン	35.3 x 50.2	6/35	北田治氏寄贈 2023年度新収蔵
23	岩崎 貴宏 1975年生まれ	テクトニック・モデル（フロア）のためのドローイング	2017年 平成29年	シルクスクリーン	35.3 x 50.2	4/35	北田治氏寄贈 2023年度新収蔵
24	岩崎 貴宏 1975年生まれ	テクトニック・モデル（フロア）のためのドローイング	2017年 平成29年	シルクスクリーン	34.2 x 47.2	6/35	北田治氏寄贈 2023年度新収蔵
25	岩崎 貴宏 1975年生まれ	アウト・オブ・ディスオーダー（海洋モデル）	2017年 平成29年	ビニールシート、使い捨て弁当箱、ストロー、輪ゴム、ペットボトル、テーブル	88.5 x 250.0 x 100.0		個人蔵（寄託） 2023年度新収蔵
26	岩崎 貴宏 1975年生まれ	アウト・オブ・ディスオーダー（夜ノ森線）	2011年 平成23年	髪の毛、ほこり、望遠鏡	左：4.8 x 1.7 x 1.0 中：6.7 x 1.3 x 1.2 右：7.5 x 1.5 x 1.5		岩崎貴宏氏寄贈 2011-SJ-002 *3階回廊よりご鑑賞いただけます
	発行：横浜市民ギャラリー	『第18回今日の作家展 NOVEMBER STEPS』	1982年 昭和57年	展覧会図録			横浜美術館美術図書室
	発行：横浜市教育文化センター	『赤れんがから』 No. 5	1983年2月 昭和58年2月	冊子			横浜美術館美術図書室
	発行：横浜市民ギャラリー	『第21回今日の作家展 インスタレーションとは何か』	1985年 昭和60年	展覧会図録			横浜美術館美術図書室
	編集：アトリエ出版社 発行：婦人画報社	『アトリエ』 No. 705	1985年11月 昭和60年11月	雑誌			横浜美術館美術図書室
	発行：美術出版社	『美術手帖 特集：美術の超少女たち』 Vol. 38、No. 566	1986年8月 昭和61年8月	雑誌			横浜美術館美術図書室

	発行：横浜市民ギャラリー	『第24回今日の作家展 多極の動態』	1988年 昭和63年	展覧会図録			横浜美術館美術図書室
	発行：安井曾太郎記念会、毎日新聞社、西武美術館	『第32回 安井賞展』	1989年 平成元年	展覧会図録			横浜美術館美術図書室
	発行：横浜市民ギャラリー	『第25回今日の作家展 かめ座のしるし』	1989年 平成元年	展覧会図録			横浜美術館美術図書室
	発行：ニューヨーク大学グレイ・アート・ギャラリー&スタディ・センター、マサチューセッツ工科大学リスト視聴芸術センター、国際交流基金	<i>Against Nature: Japanese Art in the Eighties</i> (アゲインスト・ネイチャー：80年代の日本美術)	1989年 平成元年	展覧会図録			横浜美術館美術図書室
	発行：横浜市民ギャラリー	『第29回今日の作家展 視えない現実』	1993年 平成5年	展覧会図録			横浜美術館美術図書室
	編集：金沢21世紀美術館、高松市美術館、静岡市美術館、伊藤雅俊 発行：マイブックサービス	『起点としての80年代』	2018年 平成30年	展覧会図録			横浜美術館美術図書室

## イサム・ノグチ

[ホワイト]

No	作家名	作品名	制作年	技法、材質、形状	サイズ 縦/高さ x 横/幅 x 奥行/厚さ cm	エディション	収蔵方法 収蔵品番号
27	イサム・ノグチ 1904-1988年	死すべき運命	1959年 (1962年鑄造)	ブロンズ	182.9 x 50.8 x 45.7		購入 1990-SF-003
28	イサム・ノグチ 1904-1988年	チャイニーズ・スリーブ #1	1962-1971年	ステンレス鋼	162.6 x 68.6 x 49.5		購入 1988-SF-004
29	イサム・ノグチ 1904-1988年	下方へ引く力	1970年	アリカンテ産およびマルキニア産大理石	36.2 x 90.2 x 71.1		購入 1990-SF-004
30	イサム・ノグチ 1904-1988年	マイアストラ、ブランクーシへのオマージュ	1971年	大理石 (灰色)	222.0 x 27.5 x 27.5		購入 1988-SF-005
31	イサム・ノグチ 1904-1988年	真夜中の太陽	1989年	スウェーデン産花崗岩 (黒/赤色)	220.5 x 199.0 x 119.0		購入 1990-SF-005

# 新たにむかえた作品たち——生活・手仕事・身体

会期：2025年2月8日(土)～2025年6月2日(月)

## 参考文献とその言葉

展覧会を構成するうえで参照した言葉たち

女性は感覚的だとかいうのは、文化が押しつけてきた差別で、女性もそう思いこんでいる所はあります。エロチックで派手でなけりゃならないとかね。でも、そういうことはない。女らしさなんて、男が与えたラベルですから。もう、そういう時代ではないと思います。

海老塚耕一との対談における東野芳明の発言

『NOVEMBER STEPS (第18回今日の作家展)』横浜市民ギャラリー、1982年、p.1

近所の商店街などを歩いていますと、ひとつの店が平気で3つくらい看板をつけてますし、自動販売機やベンチなどにも何やら広告のようなものがついており、そのほかお店の商品など所狭しで、きわめつけはあの電柱にくくりつけてあるビニールのお花です。それらが悪趣味だとかいうのではなく、少しのスキさえあれば美的感覚など関係なく何か飾ってやろうという発想というかエネルギーは目をみはるばかりです。私たちが毎日確実に目にしているにもかかわらず、誰も気にもとめないような、ハシにもボウにもひっかからないような「場所」や「もの」が気になって仕方ない今日このごろです。

吉澤美香が寄せたテキストより

『NOVEMBER STEPS (第18回今日の作家展)』横浜市民ギャラリー、1982年、p.16

ついこの間、岡崎乾二郎さんが南天子画廊で展覧会をなさったでしょう。あれ、素材は全部布でしたね。もし、彼がそこで展覧会をやっているという予備知識なしにポンとあそこに飛び込んだとしたら、女の人がつくった作品だと思っちゃったと思うのね。それは、残念ながらこちらの側にも既成の先入観があるということも、もちろんあるのよ。でも、そういうふうを感じるんじゃないかな。

だから、あれを岡崎さんがつくったって知って見ると、彼がすてきな女装をして現われたような気持さえしたの(笑)。

榎本了壺との対談における松岡和子の発言

「いま駆ける女」『美術手帖 特集：美術の超少女たち』1986年8月号 Vol.38、No.566、pp.48-49

性別によって弁別される写真のサブカテゴリーやその言説があらわすのは、担い手が「女」であるということ以上でも以下でもないという問題に、論客たちはそろそろ向き合うべきである。なぜなら、そのようなカテゴリーは——賞賛を集めているとみえる場合であっても——、写真界から「女性」を疎外する効果を持つからである。

長島有里枝 『「僕ら」の「女の子写真」から わたしたちのガーリーフォトへ』

大福書林、2020年、p.276

物事がどれだけ変化してきたかを知らないとき、人はその変化や、そもそも変化しうることに気がつくことはない。

レベッカ・ソルニット『暗闇のなかの希望』  
井上利男、東辻賢治郎訳、筑摩書房、2023年、p.29

フェミニズムとは、ひと言で言うなら、「性差別をなくし、性差別的な搾取や抑圧をなくす運動」のことだ。(…)この定義が気に入っているのは、男性を敵だと言っていないことだ。問題は性差別だと、ズバリ核心をついている。より具体的に言うなら、この定義は、ありとあらゆる性差別的な意識や行動を問題にしている。そういう意識をもったり行動をしたりするのが、女であろうと男であろうと、あるいはまた子どもであろうと大人であろうと、関係ない。

ベル・フックス『フェミニズムはみんなのもの 情熱の政治学』  
掘田碧訳、エトセトラブックス、2020年、p.13

親密圏は、さしあたり、具体的な他者の生への配慮／関心を媒体とするある程度持続的な関係であると定義することができる。まず、具体的な他者とは、一般的な他者とは異なって人称性を帯びた他者であり、そうした他者との関係は「他ならぬ」という代替不可能性を幾分か含んでいる。次いで、生への配慮／関心が人びとの関係を繋ぐということは、具体的な他者のほとんどは、身体性=物質性をもった存在者（embodied beings）であり、私たちはそうした他者との間身体的な関係性を生きることによって、その生の必要や欲望や困難に否応なく曝されることになる。セクシュアリティはもちろん親密圏の最も重要な側面の一つをなすが、そのすべてをなすわけではない。生・育・老・病・死といった局面においてとりわけそうであるように、私たちはつねに自立的な存在者として生きているわけではない。むしろ、私たちの生は身体を通じて互いに曝され、互いに含みあっているのであり、依存性こそ私たちの生の基本的な条件である。

齋藤純一「親密圏のポリティックス」  
『政治と複数性—民主的な公共性にむけて』岩波書店、2020年、p.221

大柄な少年はキーホルダーをポケットから出して、僕の自転車の塗装を剥がし始めた。塗装はいとも簡単に剥がれ、薔薇色の火花となった。僕はそこに座ったまま、少年が自転車の骨を鍵でこするたびに、地面にピンク色の斑点が散らばるのを見ていた。僕は叫びたかったが、英語でどう叫べばいいのかわからなかった。だから黙っていた。

僕はその日、色が持つ危険性を学んだ。色の縄張りを侵したら、暴力でそこから追い出されることもあるのだ、と。色というものが光によって明らかになる属性以外の何ものでもないとしても、その”何ものでもない”ものにも掟がある。そしてピンク色の自転車に乗る男の子は何よりもまず重力の掟を学ばなければならない。

オーシャン・ヴオン「地上で僕らはつかの間きらめく」  
木原善彦訳、新潮社、2021年、p.157

サイボーグたちであれば、性や性にまつわる具体的な事物の部分的で、流動的で、きまぐれな側面を、もっとシリアスに受けとめるかもしれない。ジェンダーは、深遠なる歴史の広がりとお興きを持つものの、最終的に、グローバルなアイデンティティとはならないかもしれない。

ダナ・ハラウェイ『猿と女とサイボーグ：自然の再発明』  
高橋さきの訳、青土社、2017年、p.345